

令和二年度 卒業式 式辞

本日、本校を巣立ちゆく、七十三回生の皆さん、卒業おめでとうございます。

まず、体育大会での皆さんからのメッセージを改めて読み上げます。

「私たち3年生は中学校生活最後の体育大会にたくさんの思いを寄せて、今まで練習してきました。

コロナウィルスの影響で、例年とは違う形になってしまったことがとても悔しいです。それでも今できることを精一杯頑張りました。こうして仲間と一緒に練習したり、何かをつくりあげることが当たり前じゃないというのを、改めて気づくことができました。日々支えて下さっている保護者の皆様、先生方に感謝の気持ちを忘れず、次の文化祭、そしてこれから向かって進んでいきます。これからも応援、よろしく願います。」

この言葉に私は今年の3年生の思いが凝縮されていると感じ、今まで大事にとっていました。

今年度は新型コロナウイルスに振り回された年となりました。今までにない貴重な経験で、学ぶこともありましたが、皆さんには随分我慢を強いて申し訳なく思っています。しかし、本校では皆さんが現実を受け止め、不平、不満を言わず、道を踏み外すことなく、淡々と学校生活を送る姿に感動し、私たち教職員も大いに励まされました。

そんな皆さんに私から二つだけ思いを伝えます。それは『人のせいにした人生を送ってはいけない』ということとです。誰かのせいで、社会のせいで、今自分がこうなっているではありません。中学を卒業したら、これから起こることは自分のせいです。決めたのも自分、何かが起こっても原因は自分にあります。その自覚をもつて、人を責めず、人に頼らず、「自分で決める力」を育んでいって下さい。人のせいにする生き方は弱く、後悔を生み出しやすいものです。人への矢印ではなく、自分に矢印を向けて、自分を高める努力を続けてください。人を変えることは難しいですが、自分を変えることはさほど難しくありません。是非やってみてください。

最後になりますが、保護者の皆様、2019年に本屋大賞を受賞した、瀬尾まいこさんの小説「そして、バトンは渡された」をご存知でしょうか？この本は家庭の事情で何回か親が変わった少女の物語です。しかしどの親も愛情いっぱいです。ある日少女は3番目のお父さんに聞きます。「急に思春期、反抗期の女子高生の親になるなんて嫌だったでしょう？」そこで、この小説で最も感動的な言葉で父親は答えます。「そんなことないよ、親になるってことは未来が2つになることだろう。自分以外の未来に手が触れられる毎日って、幸せ以外ないじゃないか」。保護者の皆様、きつと同じお気持ちではないでしょうか？お子さんのご卒業、おめでとうございます。そして今日まで、本校教育にご理解、ご協力をいただき、本当にありがとうございました。私たち教職員も至らぬ点もあったかと思いますが、お子様のために精一杯尽くしてきたつもりです。どうか今後とも、地域の皆様と共に、ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

それでは、名残は尽きませんが、卒業生の皆さんの輝かしい未来を祈念し、式辞といたします。

令和三年三月十七日

明石市立二見中学校 校長 矢野毅吉